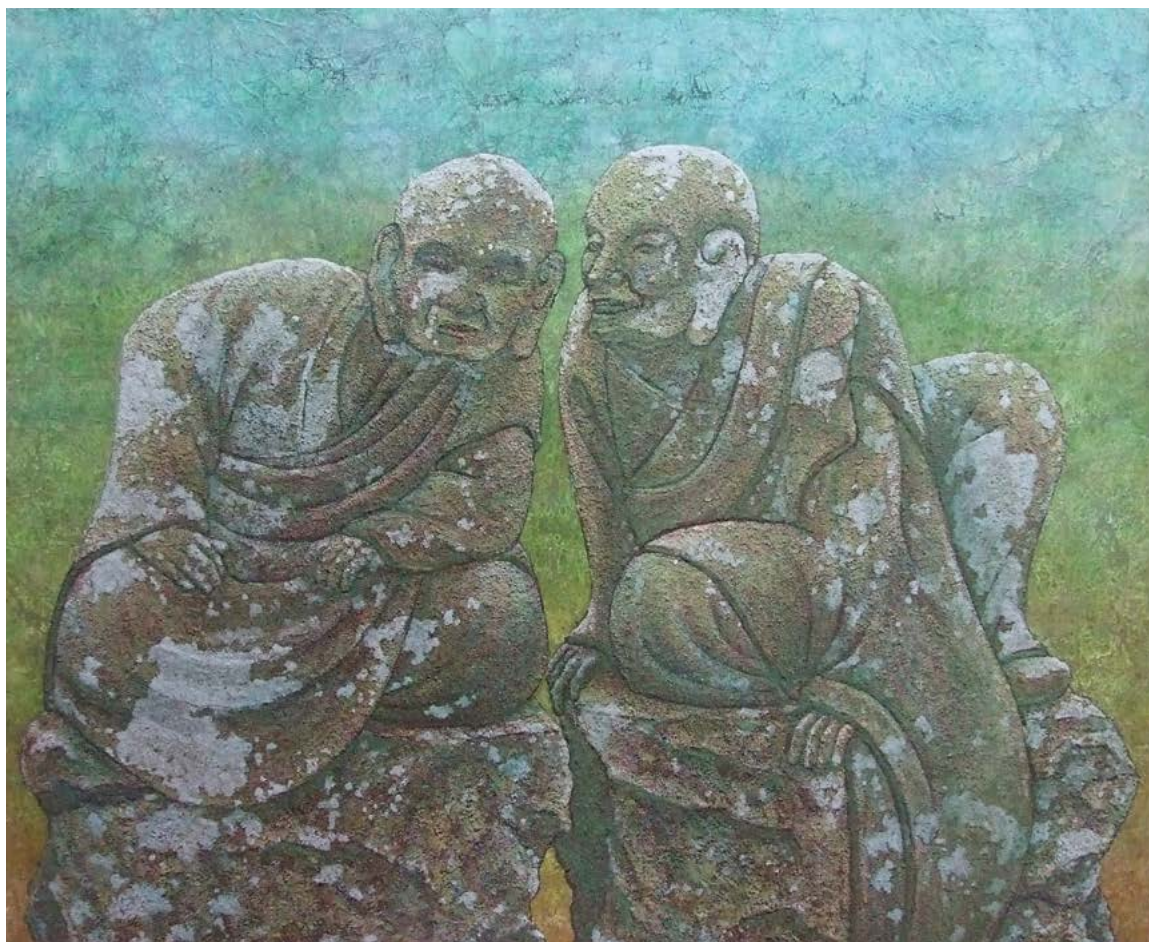


游美

- 1 富田 四郎さんの作品と作品についての言葉
- 2-3 海外美術鑑賞旅行
- 4 館長講演会
副館長あいさつ
- 5 木村武山生誕150年記念
日帰りバスツアー
- 6 会員のためのギャラリートーク
お知らせ・あとがき



富田 四郎 《ひそひそ羅漢さま》

2024年／岩絵具・水干絵具・砂・和紙／F15号／2025年茨城新興展

何で知ったか思い出せないが、川越の喜多院というお寺に五百羅漢の石仏が有る事がわかった。

私は日本画を始めて40年近くになるが、近年絵具の材料に砂を加え始めた。溪流の岩や、梅や桜の古木の質感を表すのに丁度よかった。

「石仏？砂を使えばそれこそ石仏そのものではないか」。早速予定をたて少々遠いが取材に行くことにした。石仏が500何体か有るそうなので、心踊らせながら向かった。移動に時間がかかるためスケッチはできなかったが、おもしろそうなのを何体かカ

メラに収めた。その中でなんと人間的で世俗的な羅漢さまを見つけた。「これはおもしろい」絵になると思い、制作を決めた。まず背景には、日本画独特の和紙を揉んでしわ模様をつけるもみ紙技法を用いた。制作の中で苦労したのは、自慢気に話す側と耳を傾けうなづくようなしぐさの羅漢さまのところ。その表情に、より親近感が生まれたように思う。またコケやサビを付けることにより、古色感の有るしつとりとした画面にまとまった。

(石岡市在住)

2026年2月23日～3月2日の8日間、参加者29名はローマ、ヴァチカン、ヴェネツィア、フィレンツェの世界遺産や美術館、寺院等を巡りました。ひたすら歩いて、宗教画と向き合った旅でした。

光と影の人生、カラヴァッジョ

山口 勝美



茨城県近代美術館友の会主催の美術鑑賞旅行に初めて参加しました。前から案内が来るたびいつか参加したいなと考えていましたが、仕事の都合で参加できませんでした。今回は、「イタリア美術と世界遺産を鑑賞する8日間の旅」でした。

イタリアは1997年12月に訪ねたことがあり、その時、テレビの泉にコインを1枚投げ入れたことから、再訪が叶ったのかと思っています。

ローマでは、ヴァチカン美術館、ボルゲーゼ美術館、カピトリノ美術館、バルベリーニ美術館、サンタ・マリア・デル・ポポロ教会で絵画を鑑賞しました。それぞれの美術館や教会で専門のガイドさんの説明があり、大変参考となり充実した絵画鑑賞となりました。そして、驚いたことは、5か所すべての美術館及び教会でカラヴァッジョの絵画が展示されていたことです。どうしてイタリアではカラヴァッジョが人気なのでしょう？

2016年3月1日～6月12日、国立西洋美術館で、日伊国交樹立150周年記念カラヴァッジョ展が開催されました。その時のパンフレットに次のような案内が

ありました。「ミケランジェロ・メリージ・ダ・カラヴァッジョ (1571-1610年) は、西洋美術史上最も偉大な芸術家のひとりであり、イタリアが誇る大画家です。彼の理想化を拒む平明なりアリズムや、劇的な明暗法によって浮かび出る人物表現は、バロックという時代の美術を開花させる原動力となりました。彼の画法はルーベンスやレンブラントなど、17世紀の画家たちに影響を与えました」。この記念すべき機会にカラヴァッジョが選ばれたということ、さらに彼の主な制作場所がローマであったことから、今もローマに多くの作品が残っているのだと思います。

今回の美術鑑賞旅行で、2016年に鑑賞した「バックカス」、「女占い師」、そして、昨年のお阪万博イタリア館で鑑賞した「キリストの埋葬」を始め多くの作品を鑑賞し、改めて光と影の劇的な対比の素晴らしさに感動いたしました。

カラヴァッジョは、その素行の悪さから犯罪を続け、逃亡生活の末熱病にかかり、38歳で亡くなりました。カラヴァッジョの人生も光(絵画制作)と影(逃亡生活)だったのではないのでしょうか。

最後に、このような素晴らしい美術鑑賞旅行を企画して下さった友の会企画委員会の皆様に感謝申し上げます。

(鉾田市在住)



カラヴァッジョ《キリストの埋葬》／1603-1604年
油彩・カンヴァス／300×203cm／ヴァチカン美術館蔵
PHOTO COPYRIGHT ©GOVERNORATE OF THE VATICAN
CITY STATE-DIRECTORATE OF THE VATICAN MUSEUMS



カラヴァッジョ《ホロフェルネスの首を斬るユデット》／1598-1599年
油彩・カンヴァス／145×195cm／バルベリーニ宮国立古典絵画館蔵
Gallerie Nazionali di Arte Antica, Roma (MiC) - Bibliotheca Hertziana,
Istituto Max Planck per la storia dell'arte/Enrico Fontolan



2026年2月24日 ヴァチカン広場にて

念願のイタリア美術旅

山口 浩子



「イタリアの旅は15年ぶりですよ」旅行会社の応答に迷いも消え、友の会企画の旅に初めて参加しました。想像以上の至福の8日間、イタリア美術と世界遺産を堪能した旅でした。

滞在3日目、いよいよヴェネツィア訪問。前日までのローマの晴天とは対照的に到着した空港は霧のかかった曇天！船で本島に上陸するとカーニバルの名残でしょうか、石畳に色とりどりの紙吹雪小片が残っていました。

2班に分かれ細い通路や運河に沿って移動、ヴェネツィア派の絵画を集めているアカデミア美術館、曲線の屋根と豪華な正面のサン・マルコ寺院を見学。現地ガイドさんの栄華の歴史や美術の話聞き逃すまいと必死でした。

夕方サン・マルコ広場に戻る頃、幸運にも霧が晴れてきたではありませんか！下は霧が立ち込めたまま、一方寺院の屋根の方はくっきり浮かび、正面の豪華な装飾が陽を浴びてキラキラ光り幻想的な風景に歓声が。鐘楼も先まで見え始め私達の気分も一気にアップ。ショッピングで手に入れた念願のガラスペンの書き心地は抜群、停泊中の豪華なゴンドラを見てヴェネツィア風情も満喫できました。

4日目いよいよルネッサンス花の都フィレンツェへ。街全体が世界遺産のため市内のバス移動は不可、ひたすら徒歩移動の2日間でした。

ホテルは緑のファサードの美しいサンタ・マリア・ノヴェッラ教会や中央駅の傍、ドゥオーモのドーム屋根も間近でした。訪問先は名の知れた有名なところばかり、名作を目の前で鑑賞し夢の様な2日間を過ごしました。

まずフレスコ画のサンマルコ美術館から憧れのウフィツィ美術館へ。ボッティチェッリの〈ヴィーナス誕生〉と〈春〉の2枚がさりげなく同室に、三巨匠ダ・ヴィンチ、ラファエロ、ミケランジェロの名画が次々に並ぶ部屋、ティツィアーノやカラヴァッジョも～息が止まりそうな感覚。更にパラティーナ美術館とメディチ家礼拝堂の豪華さに息をのみ、ドゥオーモの大理石幾何学模様魅せられ朝夕に周囲を散策、全てが至福の時間でした。サンタ・マリア・

ノヴェッラ教会の修復中のマザッチョ〈聖三位一体〉も印象に残りました。

帰国の朝、ミケランジェロの丘から眼下に広がるフィレンツェの街に別れを告げ空港へ。愉快的

なイタリア人気質を垣間見、現地ガイドさんの豊富な知識に感銘、同行仲間と和気藹々の食事タイム、企画関係者の皆様に感謝です。友の会の皆さん、思い切って世界探訪・美術の旅に出かけませんか！

(ひたちなか市在住)



現地で速写の旅行記から
チケット・説明・感想も併記



初日現地ガイドの
フランチェスカさん
カラヴァッジョの大ファン



筆者の旅のスケッチから

荒屋鋪透館長の講演会を聞いて

加藤 悦子

観梅も始まり駐車場が混んで大変でしたでしょう、そんな優しい口調で荒屋鋪館長の講演会が始まりました。「藤田嗣治 絵画と写真」展講演会用に作成されたパンフレットの通りに授業を受けている様に進行了しました。

1913年に藤田は渡仏しイタリア、スペイン、フランス他ヨーロッパ諸国の芸術家たちと交流し、自己主張の強い彼はおかっぱ頭、丸眼鏡、ちょび髭で目立っていたであろう。ピカソやモディリアーニ、日本人画家川島理一郎らと出会い、写真を始めたのもこのころである。第一次世界大戦後に乳白色の下地

に線描で描く独自のスタイルによる裸婦像が話題となる。1920年代のパリで画家として高い評価を得て活躍した。藤田の芸術には女性たちが深い痕跡を残している。彼は5人の女性と結婚している。1930年中南米ブラジル、アルゼンチン、ボリビア、ペルー、エクアドル、キューバ、メキシコの多数の写真を撮影した。アメリカ合衆国にて個展を開催しながら滞在し、1933年に帰国、日本国中北から沖縄まで日常生活を題材にして記録し秋田の平野征吉のため「秋田の行事」を作成した。第2次世界大戦が1939年に勃発、中国に赴き戦場を描く、1945年に終戦を迎え、1950年渡仏、1955年に君代夫人と共にフランス国籍を取得、ランス大聖堂で君代夫人と共に洗礼を受け、のちにランス礼拝堂のフレスコ画を完成させる。享年81歳、ランス大聖堂で葬儀。時代背景を知り、より深く理解できた。

(水戸市在住)



荒屋鋪館長



会場風景



新副館長あいさつ



茨城県近代美術館
副館長

西野 和徳

このたび、4月1日付けで県教育庁総務課から異動してまいりました。

長い歴史を有する茨城県近代美術館の運営に携わることとなり、その責任の重さを改めて感じております。同時に、地域の文化振興に寄与できる立場を拝命したことを、大変光栄に存じます。

近代美術館友の会の皆さまには、これまで展覧会や教育普及活動に対し、深いご理解と温かいご支援を賜り、心より御礼申し上げます。皆さまの活動

が当館の魅力を広く発信し、地域に根ざした美術館としての歩みを力強く支えてくださっていることを、日々実感しております。

今後は、より多くの方に美術の喜びや新たな発見をお届けできるよう、職員一同さらに研鑽を重ねてまいります。「県民に愛され、親しまれる美術館」であり続けるため、皆さまとともに歩みを進めていければ幸いに存じます。どうぞ引き続きご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

今日は一日まるごと「木村武山」

大貫 光宏



恥ずかしながら私が日本画家・木村武山を知ったのは、《阿房劫火》という大作を観た還暦前のことでした。中国の「史記」に基づいたこの歴史画のスケールの大きさ、火焰と煙の迫力、色彩の鮮やかさに大変感銘を受けました。そこで、今回の「木村武山生誕150年記念日帰りバスツアー」に参加しました。

3月6日は生憎の曇り空でした。友の会の美術鑑賞旅行は初めてでしたが、バスの車中では先輩会員の方々と和気藹々と話に花が咲き、あっという間に茨城県天心記念五浦美術館に到着しました。「生誕150年記念木村武山展」では、歴史画から花鳥画、仏画へとテーマ別に展示されていて、出口近くでは通常では大日堂に安置されている厨子と大日如来坐像が特別展示されていました。お目当ての《阿房劫火》もメインの場所に展示され、企画担当村木正英学芸主査から展示方法や所蔵先の逸話まで聞くことができました。また、今展の作品の多くは個人所蔵で、うち《花鳥十題》については3点ほどありました。今後、所蔵先が判明していつの日か十題全て揃って展示されることを期待したいと思います。

午後から笠間市に移動して昼食をとり、市内箱田にある生家敷地内に建つ大日堂を見学しました。ここでは笠間市生涯学習課の方から解説がありました。旧笠間藩士の長男として生まれ、幼い頃から絵画を習い、念願の東京美術学校に入学し日本画を専攻したことや「武山」という号の由来など興味深く聞けました。また、通常では事前予約がないと鑑賞できない大日堂内部の大日如来や

虚空蔵菩薩等の壁画、天井画まで見ることができました。実に色彩豊かな見応えのある仏画でした。

続いて笠間稲荷神社に移り、ボランティアガイドの方と一緒に裏手にある非公開の瑞宝閣の天井画を鑑賞しました。そして、神社の学芸員の案内で《神武天皇》や《扇面散図屏風》を至近で観ました。《扇面散図屏風》は上品で色彩が華やかでした。最後に道の駅かさまで、花より団子の私はお土産として極上モンブランを買い求めました。

画道に邁進した木村武山の60余年の生涯をギュギュッと一日に凝縮したとても有意義な美術鑑賞旅行でした。関係者の皆様、同行会員の皆様に感謝。ありがとうございました。

(水戸市在住)



笠間市木村武山屋敷内 大日堂



木村武山《阿房劫火》／1907年／絹本・彩色・軸装／141×240.8cm／茨城県近代美術館蔵

「藤田嗣治 絵画と写真」(2026年2月10日～4月12日)

「藤田嗣治展」ギャラリートークにて

黒岡 秀次

澤渡 麻里首席学芸員、すてきな時間をありがとうございました。作品を見て学生の時の美術講師が、美術準備室で作品集や、作家のことなどを話してくださったことがよみがえりました。そこで藤田嗣治を初めて知りました。その時の感想は、白い・透明な・透き通っている絵だと。今回の展覧会を見てそれは多分《舞踏会の前》だったと思います。白い裸婦の体が透き通って、向こう側が見えるのではないかと感じ、美しいのですがなんだか不思議な気持ちに

なったことを覚えています。その時以来藤田作品と出会うことはなかったのですが、今回のギャラリートークの案内が目にとまり、このような機会を生かしてこなかったのも、思い切って参加しました。澤渡首席学芸員の話は、作品や作家に対する素敵な感情がこもっていて、作品個々についてじっくりと、いつまでも講義を聞いていたい気持ちでした。(集中力と体力が維持できればですがね)

(かすみがうら市在住)



2026年3月11日藤田嗣治展ギャラリートーク参加者と澤渡 麻里首席学芸員(前列右から5人目)(筆者は前列右端)

〈友の会からのお知らせ〉

- ・「ヨシタケシンスケ展かもしれない」ギャラリートークを、2026年7月29日(水)に実施予定です。
- ・秋の国内美術鑑賞旅行を、2026年11月10日(火)～12日(木)の2泊3日の日程で神戸・大阪方面で実施いたします。
(企画委員会)

あとがき

○4月23日、水戸市の千波湖のほとりに複合施設「みと好文テラス」がオープンしました。飲食やスポーツ、サウナが楽しめる施設です。駐車場も増設されました。千波湖には一周3キロの遊歩道があります。近代美術館と「みと好文テラス」は遊歩道で繋がっており1.5キロ徒歩20分の距離です。今後の偕楽園、千波湖周辺を訪れる人々の近代美術館への回遊も大いに期待したいところです。

○本号に掲載の作品写真の掲載許可及びデータの貸与に関して下記の方々にお世話になりました。厚くお礼申し上げます：

- ・カラヴァッジョ《ホロフェルネスの首を斬るユデット》の掲載許可及び高精細画像データの貸与を、バルベリーニ宮国立古典絵画館Salvatore Vitale氏から、無料でいただきました。
- ・カラヴァッジョ《キリストの埋葬》の掲載許可及び高精細画像データの貸与に関して、Responsabile Ufficio Immagini e Diritti - Head of Images and Rights Musei Vaticani - Vatican

MuseumsのRosanna Di Pinto博士からご教示を賜りました。また画像データの貸与を有料でいただきました。

茨城県近代美術館 友の会会報

游美 No.112

発行 2026(令和8)年6月
編集・発行 茨城県近代美術館友の会
〒310-0851
水戸市千波町東久保 666-1
TEL.029-243-5111 (美術館内)
E-mail : f.momaibk@gmail.com
HP : https://fmoma.com/

印刷 株式会社 光和印刷